

意図とは何か

山本 麻衣子*

What is intention?

YAMAMOTO Maiko

abstract

We are inclined to think that an agent must have some intention when his bodily movement is an act. However, it is not easy to explain precisely what intention is.

Thinking of intention as a judgement, as Davidson did, raises another question. What connection between one's intention and his movement does it need for the movement to be an action? Davidson does not seem to succeed in solving it.

C.Peacocke asserts that intention is a disposition. This allows one's intention to be connected logically with his movement. My intention (disposition) to do A implies that I will do A if some conditions are met. In this respect, it looks better than Davidson's theory. However, there are some differences between intention and disposition. 1) It is impossible that I fail to know what intention I have, but it is possible that I do not know what disposition I have. 2) One can have intention to do A in a proper sense or in an accidental sense. On the other hand, one cannot have disposition to do A in a proper sense nor in an accidental sense.

In this paper, I showed that it is mistake to think of intention as a judgement or a disposition.

Keywords : intention, judgment, disposition, D. Davidson, C. Peacocke

あなたは電車に乗っており、あなたの目の前に、一人の男性が座っている。ふと彼を見ると、彼の頭が左右に揺れている。彼は何のために頭を揺らしているのだろうか。彼はリズムをとっているのか、それとも首の運動なのかと、あなたはいろいろと考えてみたが、その目的はわからない。そもそも彼は頭を揺らしているのだろうか。ひょっとすると、彼が頭を揺らしているのではなく、何らかの作用によって彼の頭が揺れてしまっているだけかもしれない。もしそうなら、彼の頭の動きに目的が見当たらないのも当然である。

しかし、彼の頭の動きを見ただけでは、彼がそれを行っているのか、単に彼にそのような動きが生じているだけなのかを正しく判定することは困難であるだろう。彼が頭を揺らしているのか、彼の頭が揺れているのかを正しく判定するためには、何が明らかになればよいのか。これらの間の違いはどこにあるのか。どちらの場合にも「頭が揺れる」という動きは共通しているのだから、彼の頭の動き以外の点に違いがあるのでなければならない。

キーワード：意図、判断、傾向性、D. デイヴィッドソン、C. ピーコック

*平成17年度生 比較社会文化学専攻

1. 意図

多くの哲学者は、その違いは意図にあると考えてきた。たとえば、ボールが転がっているとき、ボールは転がる意図を持っているわけではない。私たちは、そのボールが自ら転がっているのではなく、ただ転がされているのだと考える。誰かがあなたの手をつかんで、それを強制的に挙げたなら、あなたに手を挙げる意図がなくてもあなたの手は挙がる。このとき、あなたが手を挙げたのではなく、あなたの手が挙げたのである。おそらく今あなたの心臓は動いているが、あなたには自分の心臓を動かす意図はない。あなたの心臓は動いているけれども、あなたが心臓を動かしているのではない¹。これらと同様に、もしも電車で会った彼が、自分の頭を揺らす意図を持っていないなら、彼は頭を揺らしているのではなく、彼の頭が揺れているのだろう。しかし、彼が頭を揺らす意図を持っているのなら、彼は頭を揺らしているのであり、それは彼の行為であるように思われる。

しかし、そもそも「意図がある」とはどういうことなのか。それが明らかにならなければ、「意図を持って行われている動きは行為である」という主張は意味を持たない。「意図とは何なのか」という問いに答えられなければ、「結局のところ、頭を揺らすことと頭が揺れることの違いは何か」という同じ問題に戻ってしまうからである。

2. 意図と無条件的判断

デイヴィッドソンは、意図とは何かという問いに一つの答えを提示している。私たちが何かを意図的にやっている場合には、私たちはその行為の理由を持っており、「どうしてそれを行っているのか」と聞かれれば、その動きの理由を挙げることができるはずである²。この理由は、その動きの望ましさを説明するものである。たとえば、あなたが頭を揺らしたときに「頭を揺らしているのはなぜか」と聞かれれば、「そうすれば肩凝りが治るから」といった理由を挙げることができるだろう。これらは、頭を揺らすという動きの望ましさ（行わないより行った方がよいと思われるということ）を（明確に、あるいは暗に）示している。これらの理由からは、「その動きが望ましい」という判断を導くことができるだろう。あなたがその理由のゆえに、またはそこから導かれる「その動きは望ましい」という判断のゆえに動いているのであれば、それは意図的行為であると考えられる。

一方、私の頭が揺れただけの場合には、「どうして頭を揺らしているのか（どうして頭が揺れているのか）」と聞かれても、私はその動きの望ましさを示すような理由を挙げることはできない（頭が揺れている原因を挙げることはできるかもしれないが、理由を挙げることはできないだろう）。この場合には、その動きを望ましいと思わせるような理由が存在しない。そのような理由がないのだから、「その動きが望ましい」という判断も導かれない。頭が揺れるという動きが彼に生じているだけであれば、彼が「その動きが望ましい」と判断していなかったとしても何の不思議もない。

デイヴィッドソンは、意図を持つとは、「この行為は望ましい」という判断をすることであると考え、意図とは無条件的判断（あるいは、全面的判断 [all-out judgement]）であると述べている [Davidson, p99]。つまり、「行為者が行為Aをする意図を持っている」とは「行為者が『行為Aをすることが望ましい』という無条件的判断を下している」ということである。

しかし、私たちは同時にいろいろなものを望ましいと判断する。たとえば、ケーキを食べることは食欲を満たすという点で望ましいが、ケーキを食べないことはダイエットの点で望ましい。Aの車を買うことは他人に自慢できるという点で望ましいが、金銭面ではBの車を買う方が望ましい。望ましさについての判断のすべてが意図と同一であるなら、私たちはある行為をする意図と、それに反する行為をする意図を同時に持たなければならぬ。これは不合理である。そこでデイヴィッドソンは、望ましさについての条件つき判断と、無条件的判断を区別し、後者のみを意図と同一視しているのである。

「ある理由に照らせば、Aをすることは望ましい」という判断は、条件つき判断である。この判断は、「別の理由に照らせば、Aをしないことが望ましい」という条件つき判断と両立しうる。「食欲を満たすことができるという理由に照らせば、ケーキを食べることは望ましい」という判断と、「体重を減らせるという理由に照らせば、

ケーキを食べないことは望ましい」という判断は両立可能である。しかし、このような条件つき判断は、デイヴィドソンが意図であるとする判断ではない。

彼が意図と同一視するのは、無条件的判断のみである。私たちは「ある理由に照らせば、Aは望ましい」「すべての理由に照らせば、Aは望ましい」といった条件つき判断に基づいて、単純に「Aは望ましい」という無条件的判断を下す（論理的に導かれるわけではないが）と彼は考える。そして、「Aは望ましい」という無条件的判断を下すということが、Aをする意図を持つということにはかならないと彼は主張している。デイヴィドソンの主張に基づけば、もしもあなたの目の前にいる男性が「自分の頭を揺らすことは望ましい」という無条件的判断を下しているなら、彼は自分の頭を揺らす意図を持っているのであり、彼の動きは彼の行為であると言えるだろう。

3. デイヴィドソンの問題点

ピーコックは、「意図は無条件的判断である」というデイヴィドソンの主張に対して反論を述べている。ピーコックによる反論の一つは、「Aをすることは望ましい」という無条件的判断の意味が明らかでないというものである（ピーコックは無条件的判断を「AはBよりよい」という形で表現し、「よりよい」の意味が不明であると論じているが、ここでは、無条件的判断を「Aは望ましい」という形で表現し、「望ましい」の意味についてピーコックの主張を適用することにする）。デイヴィドソンが意図であるとする無条件的判断（たとえば「Aは望ましい」）の意味は次の三つのどれでもないとしてピーコックは述べている。

- ・ Aは、行為者の欲求のすべてを最もよく満たす
- ・ Aは、道徳的に、あるいは審美的によりよい
- ・ Aは、行為者の現在の欲求と価値評価だけに基づいてよりよい

また、もしも無条件的判断の意味が一つに決まったとしても、デイヴィドソンの主張には別の問題が残る。私たちは、AをすることとBをすることのどちらが望ましいのかが分からない場合にも、Aをする意図を持つことが可能である。たとえば、コーヒーを飲むことと紅茶を飲むことのどちらが自分にとって望ましいのか。休日に映画を観ることと美術館に行くことのどちらが自分にとって望ましいのか。それらがいつでも明確であるとは限らない。それでも私たちは、コーヒーを飲む意図や映画を観る意図を持つことができる。さらにピーコックは、二つの選択肢の価値がまったく同じである場合を挙げている³。このような場合にも、私たちは一方の行為を行う意図を持つことが可能である。デイヴィドソンのように意図を「Aは望ましい」という判断と同一視すると、このような場合の意図をうまく説明することができない。ピーコックは以上のようにして、デイヴィドソンの主張に反論している。

ピーコックのこの反論に対して、たとえ何が望ましいかが明確ではなかったとしても、Aをする意図を持っているのなら「Aが望ましい」と判断していると言える、と再反論することはできるだろうか⁴。もちろんこのように言ってもかまわない。しかしこれは、「『Aが望ましい』と判断すること」を、「意図を持つこと」によって定義するということである。これでは、「意図とは無条件的判断である」というデイヴィドソンの主張は、「意図を持っているなら意図を持っている」という主張にすぎず、意味を持たなくなってしまうだろう。

4. 判断と行為の関係

ピーコックと同様に、私もデイヴィドソンによる意図の説明は誤りであるとする。私の考えでは、たとえデイヴィドソンの言う「無条件的判断」をどう解釈したとしても、そもそも意図を何らかの判断と同一視することは誤りである。もしも意図が判断であるとするなら、意図と行為の間にはどんな論理的なつながりもない。たとえば、「ケーキを食べることは望ましい」という判断の中には、ケーキを食べるという行為や、私はケーキを食べるだろうということは含意されていない。そのため、（無条件的判断に限らず）どのような判断を意図であると考えたとしても、意図と行為の間にあるはずのつながりが、その判断と行為の間に存在することを説明しなければならない。

たとえば、冒頭に挙げた例の男性は数分前に転んだ際に神経を傷つけられ、彼は自分で頭を動かすことが不可能だったとする。しかし、彼はそれに気づいておらず、「頭を揺らすことは望ましい」と判断した。そして、彼がこの判断を下したと同時に、偶然にも別の作用（外部からの刺激や、筋肉の痙攣など）によって彼の頭が揺れた。これはありそうもない例ではあるが、不可能なことではない。この場合、彼が無条件的判断を下していたとしても、その無条件的判断と彼の頭の動きの間にはどんなつながりもない。このような場合には、彼の動きは行為とは呼べないと思われる。つまり、ある判断を持っていたからといって、それだけによって動きが行為であるかどうかを区別することは不可能である。判断を意図と同一視するためには、判断と行為の間に必要なつながりが何であるのかをさらに説明しなければならない。

デイヴィドソンは判断と行為の間のこのつながりについて、「意図的行為は、『aを行うことはbを行うことよりもよいであろう』という無条件的判断と直接に連動している」[Davidson, p39]と述べている。しかし、「直接に連動している」という関係を明確にはしていない。たとえば、その関係を因果関係として説明しても、問題は解決するわけではない。無条件的判断と身体的動きが因果関係にありながら、その動きが行為ではないというケースが考えられるからである。デイヴィドソン自身もその問題を自覚していたと思われる⁵。意図によって身体的動きが引き起こされると考えても、「引き起こされる」という部分に曖昧さが残るのである。

デイヴィドソンの考え方の根本的な問題は、意図と行為を切り離し、意図だけを単独で扱おうとすることである。意図が行為と論理的に独立した判断や状態であると考える限り、常に同様の問題が生じることになる。つまり、Aをすることが行為であるために、Aを行う意図と行為Aの間にどのようなつながりがなければならないのか、という問いが常に残ってしまうのである。

5. 意図と傾向性

意図は判断であるという主張よりも説得力がありそうな説明がピーコックによってなされている。彼は意図を持つということは傾向性を持つこと（次の3つを満たす状態Sにあること）であると考えている [Peacocke, p68-69]。

行為者がt1においてΦをすることをt0において意図しているのは、彼がt0において次のような状態Sにあるとき、その時のみである。

1) 次のような理由Rがある。

「理由Rに照らして、自分がt1においてΦをすることは望ましい」と彼が考えていることが原因になって、彼がt0において状態Sにあることが引き起こされる。

2) 次のような条件Cがある

Cは、行為者がΦをしようとするために十分な条件である⁶。

そして、もしも彼がt1であると信じるときに状態Sにあり、かつ、そのときCが成り立っているなら、彼はΦをしようとする。

3) 彼がt0において状態Sにあることが、「自分はt1において、Φのために自分ができようことをするだろう」という信念（推論に頼らない信念）を彼が持つという結果を引き起こす

意図が傾向性であるなら、自分の頭を揺らす人は、自分の頭を揺らす傾向性 [S1] 持っていたことになる。しかしまた、頭が勝手に揺れてしまう人も何らかの傾向性（頭が揺れてしまう傾向性）を持っているだろう。これを、傾向性 [S2] とする。どちらの場合にも傾向性を持っているが、上記の条件1)、2)、3)によって、傾向性S2は意図の傾向性S1から区別されるだろう。

a) まず、S2には、1)のような理由Rが存在しない。勝手に頭が揺れるときには、頭が揺れることが望ましいと考えるための理由Rが存在しない。あるいは、たとえ理由Rが存在していたとしても、「理由Rに照らして、t1において頭を揺らすことは望ましい」という判断のゆえに、彼が傾向性S2を持ったわけではない。

b) また、頭が勝手に揺れている場合には、彼は頭を揺らそうとはしていないので、2)を満たすような条件C

も存在しない。

c) さらにS 2からは、「頭を揺らすために自分ができるところをする」という信念は引き起こされない（彼はこのような信念を持っていない）。よって、3) も成り立たない。

ある傾向性が意図であるのは、その傾向性が条件1)、2)、3) をすべて満たす状態であるときのみである。その時のみ、その状態にある人はΦの意図を持っており、Φがその人の行為と見なされるのである。

このような傾向性を持つためには、デイヴィドソンの考えたような無条件的判断は必要ではない。必要な判断は「理由Rに照らして、自分がt1においてΦをすることは望ましい」という判断である。私たちは行為の際に、それが無条件的に望ましいかどうか（総合的に見て、他の選択肢より望ましいか）が明確ではないことはあるが、その行為が何らかの望ましい点を持っているということは明らかであるように思われる。どんな望ましきも持たないと考えている行為を自ら意図することの方が考えにくい。それゆえ、「理由Rに照らして、自分がt1においてΦをすることは望ましい」と判断していることがΦの意図を持つために必要であるとしても、デイヴィドソンの主張に対してなされたような反論は、ここでは生じない。

また、傾向性を持つことと行為をすることの間には必ずつながりがある。なぜなら、ある行為をする傾向性は、(必要な条件が成立すれば) その行為をすることを含意しているからである。この点でも、意図は傾向性であるという主張の方が、意図は判断であるという主張よりも優れているように思われる。

[1] 誤りの可能性

しかし、意図と傾向性を同一視することにも問題がある。それは、傾向性と意図には根本的な違いが存在するからである。その違いの一つは、誤りの可能性の違いである。

他人について考える限りは、意図の判断も傾向性の判断も、どちらも誤る可能性を持っている。私がある人xに関して、「xはAをする傾向性を持っている」と判断したなら、その判断は常に誤る可能性を持っている。つまり、私が「xはAをする傾向性を持っている」と判断したとしても、実際にはxはAをする傾向性を持っていないということが起こりうる。他人がどのような傾向性を持っているかは観察によって判断されることがらであり、観察によってなされる判断には、常に誤りの可能性があるのである。他人の意図についての判断にもこれと同様のことが言える。「xはAをする意図を持っている」という私の判断は誤る可能性を持っている。他人がどのような意図を持っているかということもまた、観察によって判断されることがらだからである。他人についての判断の場合は、傾向性も意図も誤りの可能性に関して違いはない。

しかし、自分の傾向性や意図についての判断はどうだろうか。「自分はAをする傾向性を持っている」という判断であれば、他人の傾向性についての判断と同様に誤る可能性がある。たとえば、「自分は自転車に乗ることができる(自転車に乗る傾向性を持っている)」と信じていても、実際には乗れなかったということはある。自分がどのような傾向性を持っているかということは、他人の傾向性についての判断と同じように、自分についての観察によって知られることであり、誤りの可能性を含んでいる。

しかし、「自分はAをする意図を持っている」という私の判断が誤る可能性はあるだろうか。たとえば、あなたが「自分は手を挙げることを意図している」と信じていたが、実際には(他人に押さえられていたなどのために)手を挙げなかった、ということは可能である。しかしこれによって、自分が手を挙げることを意図していたということが否定されるわけではない。「自分は手を挙げることを意図している」と信じていたが、実際は手を挙げることを意図していなかった、ということは不可能である。自分の意図は観察によって知られるものではない(そもそも、何かの手段によって知られるものであるとは思えない)。自分が手を挙げることを意図していると思ったのであれば、それは自分が手を挙げることを意図しているということである。

自分の意図については誤る可能性がないということは、意図の基本的な特徴であると言える。しかし、傾向性は(たとえどんなに細かい条件をつけたとしても)そのような特徴を持たない。

[2] 意図の区別

【ケースA】 私は友人にプレゼントを送ろうと思い、何をプレゼントすればよいか悩んでいた。悩んだ結果、時

計をプレゼントしようと思い、時計を買った。そしてそれを友人にプレゼントした。

このときの私の行為は、「友人へのプレゼントを買った」とも記述できるし、「時計を買った」とも記述できる。どちらも私の同一の行為の記述である。しかし、単に一つの行為について、言い換え可能な二つの記述があるということではない。このことは、別のケースを考えてみるとわかりやすい。

【ケースB】 私は、時計屋の店員に時計を買うようしつこく薦められている。気の弱い私はそれを断ることができない。自分はすでに時計を持っており、新しい時計が欲しいとも思わないが、買わざるをえないと判断し、その時計は友人へのプレゼントにしようと思いつく。そして、時計を買い、友人にプレゼントした。

この場合もケースAと同様に、私の行為は、「友人へのプレゼントを買った」「時計を買った」の二つの仕方でも記述できる。どちらのケースでも、行為の時点において、私は「友人へのプレゼントを買う」意図と「時計を買う」意図を持っている。そして、どちらの仕方でも記述されたとしても、それは私の意図的行為の記述になる。

しかし、ケースAとケースBでは、二つの記述の性質が違っている。まずケースAでは、もともと私は友人へのプレゼントを買うことを意図しており、そのプレゼントがたまたま時計だったのである。友人へのプレゼントとして適当なものが他にあったなら、私は時計を買う必要はなかったし、時計を買う意図も持つことはなかっただろう。

ケースBはその逆である。私は先に時計を買うことを意図しており、その時計を友人へのプレゼントにすることをたまたま思いついたのである。その時計を無駄にしない方法が他にあれば、それを友人へのプレゼントにする必要はなかったし、友人へのプレゼントを買うという意図も持つこともなかっただろう。

もともと何を意図していたのかということを考えれば、「プレゼントを買った」「時計を買った」という二つの記述には差異がある。それぞれのケースで、「意図的に友人へのプレゼントを買った」と「意図的に時計を買った」における「意図的に」の意味が異なると言ってもよい。ケースAでは、「プレゼントを買う意図」がもともとの意図であり、「時計を買う意図」は、もともとの意図を実行するためにたまたま持った意図である。

ケースBではその関係が逆になっている。

次のケースでも同じことが言える。

【ケースC】 あなたは車を停止させることを意図しており、かつ、車を停止させるためにはブレーキを踏まなければいけないとわかっていた。このとき意図的にブレーキを踏む。

【ケースD】 あなたは、ただブレーキを踏みたくて、意図的にブレーキを踏む。

「ブレーキを踏む」は、どちらのケースでも意図的に行われている。しかし、ケースCでは車を停止させるために「ブレーキを踏むこと」が意図されたのに対し、ケースDでは「ブレーキを踏むこと」それ自体が意図されていると言える。

しかし、意図の間にこのような区別することにどんな意味があるのかと疑問に思われるかもしれない。ほとんどの行為は何かを目的として為されており、その目的の目的、さらにその目的というように、目的の連鎖をさかのぼっていくことができる。ケースAでは、友人にプレゼントをするという目的で時計を買っているが、それが最終目的であるとは限らない。あなたは友人にプレゼントすることで、友人に感謝の気持ちを伝えることを目的としているかもしれない。あるいは、プレゼントの見返りとして、友人から重要な情報を聞き出すことを目的としているかもしれない。さらに、その情報を使って、大金を手に入れるようとしているかもしれない。このとき、「時計を買う」という行為は、「友人へのプレゼントを買う」「重要な情報を聞き出すために必要なことをする」「大金を手に入れるために必要なことをする」と記述することができる。最終的な目的が大金を手に入れることにあったのなら、その最後の記述のみがもともとの意図の記述であることになるだろう。また、さらに目的をさかのぼっていくことができるなら、最終目的を実行するために持った他の意図はすべて附随的な意味での意図ということになる。私たちの持つ意図のほとんどがこのような意図であるなら、それ自体としての意図とそれに付随して持たれた意図を区別することが、意図の説明にとってそれほど重要ではないように思われるかもしれない。

たしかに、行為には目的があり、さらにその先にも目的があり、目的の連鎖が続いている。その中で最終的な目的による意図の記述のみが、それ自体としての意図であり、その他はすべて付随的な意図であると言ってもよい。

しかし、ケースAとケースBにおける「時計を買う」という記述に違いがないということにはならない。目的の連鎖や意図の連鎖の中で、より高次の意図、より低次の意図といった違いがあり、すべての意図の記述が同レベルで並んでいるわけではないということは疑えない。

そして、このレベルの違いは責任が問題となる場面で重要になる。ある人が意図的に殺人を行った。しかし、a) 自分の身を守るために意図的に殺した場合、b) お金を得るために意図的に殺した場合、c) 人を殺すこと自体を目的として意図的に殺した場合では、殺人に対する罪の重さが異なるだろう。a) と b) は、「意図的に」と言っても、それは付随的意図である。これらの場合には、人を殺さなくても自分の身を守ることができるのであれば、あるいは、人を殺さなくてもお金が手に入るのであれば、殺人をする必要はなかったし、殺人をする意図を持つこともなかったと考えられる。これに対して、c) における「意図的に殺した」の意図は、殺人自体が意図されているという点で a)、b) とは異なる。

そして、このような意図の違いが存在するということが、ピーコックの主張の問題点となる。ピーコックによれば、意図は傾向性である。しかし、彼の定義による傾向性では、高次の意図と低次の意図の区別をすることは不可能である。ケースCとケースDを考えてみよう。どちらの場合にも、あなたはブレーキを踏む意図を持っている（意図を持っている時点をと0、ブレーキを踏む時点をと1とする）。ピーコックによれば、あなたは次のような状態S3にあるのである。

1) 次のような理由Rがある。

「理由Rに照らして、自分がt1においてブレーキを踏むことは望ましい」とあなたが考えていることが原因になって、あなたがt0において状態S3にあることが引き起こされる。

2) 次のような条件Cがある

Cは、あなたがブレーキを踏もうとできるために十分な条件である。

そして、もしもあなたがt1であると信じるときに状態S3にあり、かつ、そのときCが成り立っているなら、あなたはブレーキを踏もうとする。

3) あなたがt0において状態S3にあることが、「自分はt1において、ブレーキを踏むために自分ができることをするだろう」という信念（推論に頼らない信念）をあなたが持つという結果を引き起こす

ケースCでもケースDでも、あなたはこれらの条件を満たす状態S3にある。しかし、ケースCとケースDでの「ブレーキを踏む意図」は、まったく同じ意図ではない。ケースCでは、「ブレーキを踏むこと」は「車を停止させる」というより高次の目的を実行するための意図であるが、ケースDでは「ブレーキを踏むこと」自体が意図されている。この違いを行為者の状態の違いとして表すことにピーコックは成功していない。ブレーキを踏むのが意図的行為だとしても、常にブレーキを踏むこと自体が意図されているとは限らないのである。

もしもピーコックの傾向性の定義の中にこの違いが現れるとしたら、それは条件1)の理由Rが異なるという点だろう。ケースCでは、「ブレーキを踏めば車が止めることができるという理由に照らして、ブレーキを踏むことは望ましい」と判断されるのに対し、ケースDでは、たとえば「ブレーキを踏むことは快いという理由に照らして、ブレーキを踏むことは望ましい」と判断されるだろう。しかし、このような理由Rの違いは、状態S3の違いには反映されない。ピーコックの主張に基づけば、傾向性Φをもつために必要とされているのは、条件1)を満たすような理由Rがあるということのみである。Rの違いによって傾向性に違いが生じるといった論点は、彼の主張には含まれていない。

傾向性と意図の間には、以上のような違いが存在する。したがって、ピーコックによる意図の説明は成功しているとは言えない。

6. 結論

これまで、意図的行為と行為ではない身体的動きの違いは、行為者に意図があるかないかの違いであると考え

られてきた。しかし、意図があるとはどういうことなのかを明らかにすることは簡単ではない。

この論文では、デイヴィドソンとピーコックによる二つの主張を紹介し、それぞれに対する問題点を指摘した。デイヴィドソンのように意図を判断と考えるときには、さらに意図と身体的動きの間のつながりについて問わなければならない。どのような判断を考えたとしても、判断と身体的動きの間に論理的なつながりは存在しない。そのため、ある動きが行為であると言えるためには、判断が存在するだけでなく、それらの間に一定のつながりが見出されなければならないのである。しかし、このつながりを説明することは困難であり、デイヴィドソン自身もそれに成功していないと思われる。

ピーコックは、意図とは傾向性であると考えた。この傾向性とは、ある行為をする傾向性であり、(条件が成立すれば)身体的動きが生じることを含意している。この点では、意図は判断であるという主張よりも優れているように思われる。しかし、意図と傾向性には、決定的な違いがある。一つは、自分の意図について誤る可能性がないのに対し、自分の傾向性については誤る可能性が常に存在するという点である。もう一つは、ある一つの行為について、その行為の意図を複数の仕方でも記述したとき、それらの記述の間にある高次の意図と低次の意図の区別を、傾向性によっては表すことができないという点である。

この論文では、以上のような議論により、意図を判断や傾向性と考えることが誤りであるということを示した。

注

- 1 「私が心臓を動かしている」という言い方も可能だが、それは行為ではない。ここでは、行為と行為ではない身体的動きの区別を問題にしている。
- 2 デイヴィドソンは、行為に対する賛成的態度と信念を行為の基本理由であるとしている。
- 3 両利きで空腹の人がいる。彼の右前と左前に、質的に同等のフルーツの入ったボウルが置かれている。彼は二つのうちの一つ（たとえば、左のボウル）に向かう意図を持つだろう。しかし、彼が左側の方がよりよいと判断していたと言うことはできない [Peacocke, p56]。
- 4 意図的行為の際に無条件的判断を持っていないことも可能である。行為の理由から直接に行為が出てくると考えてもよい。そのように考えれば、無条件的判断を挟まなくても意図的行為を説明することが可能である。デイヴィドソンも、意図的行為の際に常に無条件的判断（意図の形成）があるとは限らないと認めている [Davidson, p88]。ただし、デイヴィドソンは純粋な意図を無条件的判断と同一視しているのだから、行為を伴わない意図があるときには必ず無条件的判断があると考えなければならない。
- 5 デイヴィドソンは、以下のようなDaniel Bennettの例を引用している。
ある男性がある人を射殺しようとしたが、撃ちそこねた。しかし、発砲がブタの群れを驚いて走り出させ、それが相手を踏みつぶして殺した。このとき、相手を殺そうとしたことが原因となって相手が死んでいるが、行為者が意図的に相手を殺したとは言えない。
欲求された結果が意図的であることを保証するためには、結果を合理化する態度と、欲求された結果の間の関係が正しい種類の道筋を通っていないなければならない [Davidson, p78]。
- 6 「Φをしようとするために十分な条件」は、「Φをしようとするために十分な条件」とは異なる。

【引用文献】

- Davidson, Donald, "How is Weakness of the Will Possible?", in D. Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press, 1980
- Davidson, Donald, "Intending", in D. Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press, 1980
- Davidson, Donald, "Freedom to Act", in D. Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press, 1980
- Peacocke, Christopher, "Intention and Akrasia", in: Bruce Vermazen and Merrill B. Hintikka (ed.), *Essays on Davidson Actions & Events*, Oxford: Clarendon Press, 1985